

少年少女
のための 国民文学



今昔物語

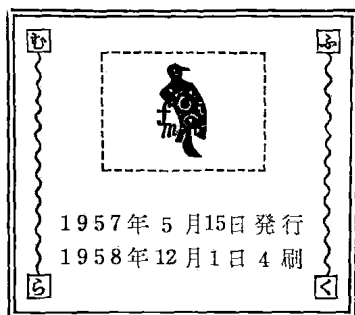
めの国民文学

今昔物語

木俣修



福村書店刊



少年少女のための
国民文学 ⑩
—今昔物語—

定価 330yen

著者	木俣 修
	東京都世田谷区太子堂町215番地
発行者	福村 保
	東京都文京区真砂町36番地
印刷者	谷 上 実
	東京都台東区上野山下町2番地
印刷所	弘済印刷株式会社
	東京都台東区上野山下町2番地

発行所	東京都文京区真砂町36番地 電話小石川 92 660・4664番 振替口座東京 78313番	株式会社 福村書店
-----	--	-----------



口絵説明（上野図書館蔵）

今昔物語絵巻
千枝飛彈守惟久筆

著者 木俣修

明治三十九年鎌賀具に生れ、東京高等師範学校国文科卒業。大正末期より北原白秋の門に入り作歌、学生生活の中に歌人として業績を積み、歌集に『高志』『冬曆』『落葉の章』『轡車』等。研究書に『白秋研究』『近代秀歌』『近代短歌の諸問題』他十数冊がある。少年少女のための著書には『私たちの歌集』『わらべうた歳時記』『百人一首の読み方』などがある。昭和女子大学教授。成城大学講師。日本文芸家協会々員。日本児童文芸家協会々員。短歌雑誌『形成』主宰。

現住所 東京都世田谷区太子堂町二一五番地

そうてい カット 太田 大八
さしえ 東光寺 啓

は し が き

『今昔物語』は今からおおよそ九百年ばかり昔、平安朝の末ごろに世にでた物語です。『竹取物語』とか『源氏物語』などのでた時代のあとからでたもので、それらの物語とはおもむきをことにしています。

天竺（印度）の部・震旦（中国）の部・本朝（日本）の部と三部にわかれていて、三十一巻、千編あまりの短い話がおさめられています。そのうち印度や中国の話は仏さまの靈妙な力だとか、仏さまの功德だとかいう仏教についての話が大部分ですが、日本の話は日本の全土にわたる伝説とか、あるいは教訓の話とか、または奇談、冒險談、人情談などといったさまざまな話が、ぎっしりとつまっています。

平安朝の末ごろといえば、中央の貴族たちが持っていた支配力がようやくくずれかけて、地方の豪族たちが権力をもたげ出す時期で、世の中のすがたがいろいろと混乱してくるのですが、『今昔物語』はそのような世の中のすがたを色濃く反映しています。『源氏物語』は貴族社会を中心とした物語であったのですが、この『今昔物語』になると民衆の社



会が中心となっています。貴族も出て来ないことはありませんが、主要な人物として登場して来るのは新興階級である侍や、坊さんや、一般の庶民、つまり農民、商人、漁夫といった人々です。それだけではなくまだ相撲取とか盗人とか、乞食とかいったものまで続々と出て来、更に鳥やけだもの、鬼とか天狗とか怪け物とかも主役になって登場して来るのです。新しい時代が来る前夜の世の中の姿、そこに生きる人間の動きというものが、いきいきと描かれているのがこの『今昔物語』だということができましよう。

文章は和漢折衷体といった和文と漢文とのいっしょになったような新しい文体で、写実的な態度で描かれていますからきびきびとしています。この本はそのたくさんの話の中から日本の部の四十六篇を選んで、やさしい口訳をほどこしました。

おそろく読み出したらおもしろくてやめられないのではないかと思います。近頃の雑誌や書物などに盛られた毒々しい軽薄な話にくらべて、はるかに大きな少年少女の興味をみなさんに与えるであろうと私は信じています。

昭和三十二年桜の花の咲く日

木 俣 修

今昔物語目次

源信僧都の母

金の餅

亀の恩がえし

六の宮の姫君

鴨と侍

仏さまの声

酒壺の蛇

犬にやしなわれた捨子

猪にばかされた坊さん

ひどい目にあつた男

二

九

一六

一九

三三

三五

四七

五三

五四

五七

相撲取と学生のけんか

六〇

大きな蛇と力だめし

六一

絵かきと大工のわざくらべ

六二

不思議な琵琶

六三

どろぼうと笛を吹く男

六四

どろぼうをゆるした武士

六五

鷲にさらわれた赤ん坊

六六

生き埋め事件

六七

金の入った瓶

六八

水の精

六九

人を食う鬼

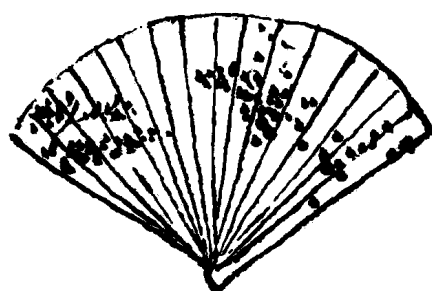
七〇

川原の院の一夜

七一

おそろしい獵師の母

七二



白骨の妻 はつこづま

一五八

馬の尻に乗った狐 うま しり の のり た きつね

一四四

三人の旅人 さんにん たたびと

一五一

武士の物見 ぶし ものみ

一五四

小寺の小僧 こてら こぞう

一五八

どろぼうをだます

一六〇

毒茸 どく たけ

一六三

禅珍内供の鼻 ぜんちんないぐ はな

一六五

踊る尼さんたち おどー あま

一六九

猫ぎらいの大夫 ねこ だいか

一七二

ひきがえる

一七六

墓穴のなか はかあな

一八二

女の怪盗 おんな かいとう

一八四

羅城門らじやうもん

一九三

虎と鰐とら わにざめ

一九六

主人を助けた犬しゆじん たす いぬ

一九八

猿の恩がえしさる おん

二〇〇

葦刈りあしか

二〇五

おぼすて山やま

二二一

馬にされた坊さんうま ぼうさん

二二三

満農の池まんの いけ

二三三

わすれ草と紫苑わすれくさ しおん

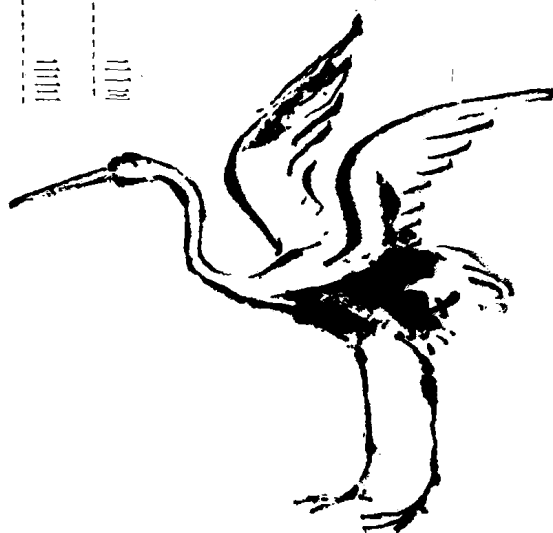
二三四

蛇を食べさされるへび た

二三六

解説かいせつ

三六



今^{こん}
昔^{じゃく}
物^{もの}
語^{がたり}



源信僧都の母

今は昔のことです。

比叡山ひえいざんの延暦寺えんりやうじに源信僧都げんしんそうずという坊さんがいました。

大和国やまとのくにの葛下かつらぎのしもの郡こおりに生まれ、幼い時から比叡山にのぼって、いっしょうけんめいに勉強しました。やがて、そのかいがあつて、大そう学問のあるえらい坊さんになりました。

そのころ、三条にお住いになる、大后たいごの宮と申しあげ、お后きさきの御殿ごてんで法華經ほけきやうというお經きやうの説法せつぽうをする会かいがおこなわれることになりました。これは法華八講ほけはつこうといつて、八卷かんの法華經を八人の坊さんが説法するきまりになつてゐるものでした。その八人は比叡山で学問をしたりつばな坊さんの中から、えらばれましたが、源信はその中の

一人でした。

お后などから、このようなおまねきをうけることは坊さんとして名譽めいよなことでした。そこでりつぱに説法をはたすと、評判がよくなつて、また今度こんどは別の高貴こうきなかたからまねかれるというようになつて、その坊さんはだんだん有名ゆうめいになるのです。勉強をして学問を積んだ坊さんたちは、みんなそのようになることを願つていました。源信の喜よろこんだことはいうまでもありません。

源信の説法はりつぱなできでしたので、集まつた人々から大そうありがたがられました。そして大后からさまざまないただきものをしました。

「そうだ。このことをいなかのお母さまに知らせよう。

わたしが一人まえの学問をしりつばな僧になることを
お母さまはどれほど待っていてくださったことか……」

こう思いつくと、いただきものをとりわけ、手紙をそ
えて大和国にいるお母さまに送りました。

「お母さま、どうかお喜びください。私は大後の宮さま
のご八講に講師としてえらばれて、お説法を申しあげま
した。さんざんごしんばいをかけましたが、やっとここ
までになりました。しかしもっともつと勉強して、いま
に名僧といわれるようになるつもりです。この品は、ほ
んのわずかですが大后さまからいただいたものですか
ら、お目にかけます」

源信はお母さまもきつと喜んでくださるだろうとその
返事を待っていました。やがて使のものが返事を持って
かえってきました。

「けっこうな品をいただいてありがとうございます。おまえもその
ようなりつばな学問を身につけたお坊さんになったかと思
うと、母はうれし涙がこぼれるほどです。しかしなが
ら、ご八講とやらで高貴なかたのご殿におまえがあら

れることなどは、母ののぞんでいたことではありませんぬ。
家には女の子はたくさんあったけれど、男の子といって
はおまえひとり。そのたいせつな男の子を一人まえの男
として世間の仲間入りをする元服もさせないで、小さい
ころから比叡山にあげたのは、なんのためだとお思いで
すか。おまえが勉強して、深い学問をきわめて、あの多
武の峯の増賀聖人さまのような、貧しい人たちを助ける
ほんとうに徳の高いお坊さんになり、母が死んだあとを、
よくとむらってもらいたかったからなのです。それをお
まえがはなやかな場所に出て、名僧だなんていわれてち
やほやされるのを喜んでゐるなどのことは、母は大き
いです。母はもう年をとって、いつ死んでしまうかもわ
かりません。どうか生きてゐるうちに、おまえがほと
うの聖人になって、しもじもの人からもうやまわれる
がたを見てから、安心して死にたいと思います」

僧都は、読みながら涙をらはらとこぼすのでした。
そして泣きながらまた返事を書きました。

「お母さま、ありがたいお手紙はいけんいたしました。

源信はけっしてそのようなわけだけはやかな僧にな

ろうなどとは思っておりません。ただお母さまのお元氣
なうちに、このようにとうとい宮さまがたのご八講など
にまいったということを、お知らせしておきたいと思っ

て、いそいで申しあげただけのことです。お手
紙のおことばを読んで、お母さまのありがたいお心に泣
いてしまいました。これからお母さまのおことばどお
りに、いっしょうけんめい山にいて修業をいたします。

そしてきつとりつばな聖人になります。お母さまがあ
いたいとおっしゃるまではけっして山を下らないつもりで
おります。それにしましても、お母さまのおことばには
ただただ頭がさがるばかりでございます」

この手紙を見たお母さまからはまた返事がきました。

それには、

「おまえのりつばな心がけを聞いて、母もすっかり安心
しました。もうこれでいつ死んでもよいと思うようにな
りました。ほんとにうれしく思います。このうえともゆ
だんしてはなりませんぞ」

とありました。

お母さまからもらった手紙を、僧都は、經文の中にま
きこんでおき、まようことがあるおりなどにはとりだし
て泣きながら読んで、心をはげますのでした。

年月ははやくすぎさって、山にこもってからもう六年
たちました。そして七年目の春、僧都はひさしぷりにお
母さまに手紙をやりました。

「六年にわたる山ごもりのあいだ、おあいすることもな
くすぎましたが、お母さまはわたしにいたいとお思い
になつてはいらっしやいませんか。もしそのよ
うでございましたら、ちょっとお目にかかりにまいりま
す」

お母さまからの返事はこうでした。

「母とても、ほんとうのことを申せば、おまえにいたい
と思います。けれども、いまここでおまえにあったか
らといって、この世に生まれてきた人間がおかしてい
る、さまざまな罪が消えてしまうというわけではありま

せん。おまえが山にこもって、いっそう修業をつんでい
るということを聞くのが、この母のなによりの喜びです。
こちらからあいたいというまでは、けっして山を下りて
はなりません」

僧都はこれを見て、

「なんというえらいお母さま……」

といって涙をなきました。お母さまとでもどんなに
かさびしい日を送っていらっしやるだろうに、世間の母
親とはちがつて、じつとがまんをしていらっしやるのだ
と思つて、いよいよ修業をしつつけるのでした。

このようにして九年目――

ある日、僧都はなんだか心が急にさびしくなりまし
た。そしてお母さまがたまらなくこいしくなってきました。
た。

「お母さまは、こちらからいつてやるまではけっしてき
てはならぬとおっしゃった。しかし今日のようなこのこ
いしさは、ふつうではない。もしかしたらお母さまのお

亡くなりになる時が近づいたのではなからうか。それと
も、わたしが死んでしまうのであろうか」

こう思うと、僧都はもうじつとしてはいられないきも
ちでした。

「来るなというおことばだったが、もう待つてはいられ
ない。かまうことはない、行つてみよう」

僧都は決心してとうとう山をくだりました。

近江の琵琶湖のほとりから母の住む大和の国まではか
なりの道のりです。馬に乗つて、やすむひまもなく道を
いそぎましたが、思うようには進みません。それでもそ
の日のうちにやつと大和の国にはいることができまし
た。胸さわぎがいっそうはげしくなってくるのをどうし
ようもありませんでした。

と、ちょうどその時です。はるかむこうから、いそぎ
脚にやってくるひとりの男が目にはいりました。近づい
てみるとその男は木の枝につけた、ひと目で手紙と知ら
れるものを持っています。なにか気がかりなので、僧都
は、

「もしもし、どちらへおいでなさるのか」

と、呼びとめました。男はびっくりしたようすで、

「比叡のお山においで源信僧都さまという方に、その母さまからのお手紙をおとどけにいくのです」

「なに、源信とな。その源信はこのわたしじゃ」

こういつて、僧都はその手紙をひたたくるようにうけとつて、馬を急がせながら、ひらきました。手紙はあんなつかしいお母さまの筆蹟ではなく、誰か下手な人の字で走り書きがしてありました。僧都の胸にははっと暗いかげがさしてきました。

「代筆とは……」

不安げにこうつぶやいて、読んだ手紙には、

「このごろはなんということもなく気分がすぐれません。いつもの風邪ではないかと思つていますが、年のせいか、ここ二三日すっかり元気がなくなつてしまいました。こちらからいつてやるまでは山を下りてはならぬと、強いことを申してやりましたけれど、ことによると、こんどは死ぬのではないかと思ひます。おまえの顔を見

ないで死んでしまうのかと思うと、心残りでなりませぬ。源信や、おまえがこいしくてなりませぬ。この手紙がついたら、ひとときも早く来てくだされ」

と書いてあります。

（あのふしぎな胸さわぎは、このためだったのか。親子のちぎりというものはこんなにも深いものなのだ）
涙をながしながら僧都は心にこう思うと、やがて、

「いそごう」

と、馬にひとむちくれて、お供のものとともにお母さまのところへまっしぐらに走りしました。

その日の夕方、やつのことになつかしいお母さまのいるわが家の門にたどりつきました。

馬からおりると、僧都はころがるように病室にはいつていきました。お母さまはもうすっかり弱りきつていて、ふたたびよくなるみこみはないというようすでした。
「お母さま。源信ただいまかえつてまいりました」

お母さまの耳に口を近づけて高い声でこうあいさつを

